
春と夏のあいだに

大野 倫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

春と夏のあいだに

【Nコード】

N3555B

【作者名】

大野 倫

【あらすじ】

わたしは古い家に住んでいる。家には大きな桜の木がある。それはとても大きく、それが小さな庭の中心だ。わたしは、さして大きくない会社に勤め、たまに彼氏と過ごし、暇になった休日はビールと小説が恋の相手。25歳。女。とても話すのが苦手。すごく幸福というわけではないが、不幸でもない毎日。悲しいと思ってても泣くことができない、ナキムシな普通の女の子。

古い紙の匂いがする。ざらついた手触りのする深い緑の表紙、それを開くとインクのにじんだ文字を見ることができる。この家で見つけたある人の日記帳。

外はカンカン照り。温度計は30度を越し、刺すような日差しが降り注いでいた。夏の暑さで汗ばんだ体を、窓から侵入した一陣の風が通り過ぎて行く。

私は畳に寝転びながら、額の上にサイダーの入ったグラスを乗せ、その冷たさを味わった。

薄いノースリーブとホットパンツでは、女としては少しはしたなかなと少しだけ思う。目の前には、木目の美しい天井板。ひとつ小さく開いた穴から、深く暗い世界を覗くことができた。

グラスから滴る水滴が、髪の間をすうっと落ちていく。目を閉じ、鼻をひくひくとさせ、日記の匂いでいっぱいにする。私はゆっくりと息を吸い、そして息を吐いた。水滴が頬を伝う、涙のあとのように。濡れた畳が緑のシミをつくる。名残惜しくもグラスをテーブルに置き、心地よい冷たさを手放した。

蝉の声が煩く耳に届く。短い一生を謳歌しているのか、短すぎる生を嘆いているのか。それは誰にも判らない。顔の上で日記を開くすこし日焼けしたページをめくると、下手くそな一文字一文字がいつものように現れた。

『自分の領域がとてもせまい。

すべての事柄をすべて知っているかのように、毎日がくりかえし同じことで過ぎていく。

僕の領域を広げようと心に決めても、今、僕の心はすすけた白い殻のなかでうずくまっている。

あの人に笑顔を見せたい、けれど私は顔をふせてしまう。
あの人といっしょにいたい、けれど離れようとする私がいる。
傷つけないように、傷つかないように。

僕しかない一人ぼっちの世界。』

私がその日記を見つけたのは桜の花が咲き始めた季節。

物言わぬ桜の木々がおびただしい数の蕾をつけ、そのすべてが同時に、抜駆けもせずいっせいに花びらを広げるそんな頃。桜の花が咲き誇り、桜色の雲の下にいと、なんだか童話の世界の住人になったように思う。

この頃になると、いつか花の数を数えてみたいという、よく判らない気持ち芽生えてくる。花の一つに一人の人生。生きている人々の命が桜の花に宿り、風に飛ばされて散る花、しぶとく咲き続ける花、色々な人間模様を見せてくれる。そんな気がする。

花が散り葉桜になると、人々は桜の木を見向きもしなくなる。皆のなかで桜の木が、ただの木になってしまふのだろう。どうでもいいけど子供の頃に、

「桜花ちり 人もちりゆく 祭りあと」

と町内の俳句の会で詠んだところ、近所のお婆ちゃんから褒められたことがあった。

緑色の葉が茂り、桜の木がただの緑色した木になると、夏の匂いが微かにしてくる。誰も気にしない桜の季節が終わった木々。子供の頃からなぜだか私は、花びらのついていない緑の木を、「桜の木」と言っては喜んでいた。

畳から起き上がり、台所でヤカンに火をかける。ぎしぎしと音のする木の窓を開け、タバコをとりだす。まるい火をともし、息を吸う。ヤカンから出る白い蒸気が窓の中の風景を隠す。オレンジ色の光が点滅し、乳白色の煙の渦が浮かんでいる。

『ふっと止まっていることがある。

ずっと歩いてきたのに、あるとき止まっている自分に気づく。

教室の席に座り、黒板に書かれたものを書き写す。ただそれだけを黙々とこなす。

楽しいことを考えたり、窓の外を見たり、あの人のことを思ったりしない。まるで自分がいないような時間。

生きている中でそれはほんの一瞬のことだけど、その刹那に捕まると長くゆるやかな感覚のなかで溺れるのだ。

何度ももがいて、何度も苦しむ。

くりかえし　くりかえし

くりかえし　くりかえし

水のなかから空をあおぎ見る。

ゆらゆら体は浮いたり沈んだり。

空気を肺にいれて水のもとに帰り、それが泡と消えたら空のした。くりかえしじらされ昇っていく。』

私は古い家に住んでいる。

生まれてからほとんど面識のない、叔母である弥生さんから、なぜだか就職のお祝いとしてこの家を譲り受けた。母の妹とはいえ、贈り物が家、親戚一同もちろん私も驚いていた。

弥生さんからこの家を渡される時、私だけでなく父や母も、嬉しいような申し訳ないような不思議な気持ちでいっぱいだった。ただ弥生さんだけが、至極当前とゆるやかに佇んでいた。

大学を出てから私は、しばらく職につかず、だらだらと過ごしていた。普通に喫茶店で働いたり、陶芸教室に通ったり、少し味見をしては次のもの。そんな落ち着きのない生活をしていた。こういう

のをモラトリウムとでも言うのだろうか。安定はないけど刺激はそこそこ。社会人でも学生でもない微妙な自分。小さいながらもたくさんのお出来事に巻き込まれ、そこで出会った人たちに、私は優しくされたり騙されたりした。

そんな生活が一年ばかり続いたあと、あまり大きくない会社に就職した。なんととはなしに働こうと思ったのだ。食品を扱う会社で、一人身には十分な給料が出るので文句はない。会社の人たちともまあまあ上手く付き合い、勤めてもう二年になる。

この家は会社から近いし、とても満足している。しかし、なぜ弥生さんはこの家を私に贈ろうとしたのだろうか。近いから、それだけで贈り物に家はないだろうに。今でもその答えは出ない。この古い家に住み始めてからも、やはり弥生さんとの関わりはまるでないのだ。

この家はとても小さく、またとても狭い。私はこの古く小さな家には相応しいふさわと思うのだが、ささやかな庭がある。そして、ひとつの桜の木がそこ居座っている。その幹はいやに太く立派だ。あまりに育ち過ぎたために、ささやか庭ではその木のまわりを歩くのも大変なくらいだ。まるで身体だけは大きく育った頭の悪いバカな子供のようなのだ。

この古い家で私は日記を見つけた。見ようによっては、古くも、また新しくも見える日記を。

タバコの煙の余韻が残る台所から、歪んだ窓のなかの桜を見る。小さな庭の大きな桜の木は、古い家を侵食するかのように広がり、木の枝が木の壁に触れ、家のなかに入ろうとずうずうしくも優しく家を覆っている。

『あの人が誰かとしやべってる
あの人が誰かに笑ってる

いろんなちっちゃいことまできになって

ぼくはとても暗くなる

そんな自分がいやで

すぐにいらいらしてしまう

きにしちゃだめ

きにしちゃだめ

こんなぼくは、ぼくが思てるボクじゃないよ

ぜんぜんちがうんだ

だからこころの裁判官は だめですよ って

ずっと言てる小さな声で

心のなかでぼくをいじめる

ちくちくちくちく

けどほんとにそうかなあ？

あの人がきになったらダメかなあ？

おもっちゃいけない気持ちってなんだろう？

きつとぼくが、ボクってこう！ってかかってに思ってるだけなんだ

ボクはいちまいだけじゃない

なんまいもページがあって ページが集まって とじられる

ぼくは一冊の本

あの人が気になるボク

あの人を思っで悲しくなるボク

そんなことを考えているボク

夢をみるボク

みんなボク

ひとりのボク』

引っ越してすぐ、私は家のすみずみまで掃除をした。台所や床といった普通の場所だけでなく、天井や雨樋なども掃除をした。かなり気合の入ったものになったのは、どこか家全体が薄汚れていたから。前の持ち主である弥生さんは、綺麗好きとは言えない人だった。

弥生さんは私と十歳違いの三十の半ば。弥生さんの姉である、私の母とはかなり歳が離れている。弥生さんがまだ幼い頃に母は父のところに嫁いでいて、母が言うには、ほとんど弥生さんと何かしたという記憶がないとのこと。今でもたまに連絡を取り合っていて、いっしょに住んでいた頃は、母は学校の友達とおしゃべりに夢中で、弥生さんとあまり遊ばなかったそうだ。

この家は母が生まれ育った家ではなく、それほど仲の良くない母は、なぜ弥生さんがこの家に住むことになったのか知らないそうだった。ただ母が、

「その家で生活を始めたころ、たまたま弥生と会う機会があったのだけ。そのときの弥生の顔にはなにもなかった。まるで、自分の感情が表に出てこないように、精一杯押さえつけているみたいで。」そう、すこし辛そうに言っていたのを覚えている。

初夏のような五月。五月晴れ。引越し業者のトラックが走り去ると、家具やら、食器の詰ったダンボールやらが、ちよつとした山になっていた。女の私が運ぶには無理があるだろうと考え、前もって会社の同僚、北村祐二にそれらを運んでもらう約束をしていた。入社したてで付き合いの浅い北村に頼んだのは、彼氏の省吾が忙しかったのが理由のひとつ。年が近く、サバサバした性格だったのがひとつ。北村が、なんか引き受けてくれそうだったのがもうひとつ。案の定、あっさりと北村は引き受けてくれた。そんなこんなで、北村に大まかな家具の配置を伝えあとを任せると、私はオレンジ色のツナギに

着替え、気合を入れて掃除に取り掛かった。

そこいらのホコリをハタキで落とし、掃除機を使わずに部屋という部屋をほうきで掃き、床や廊下を何度も雑巾で磨いた。この古い家の汚れ、時間のアカ、この家に住んでいた人の欲とか悲しみとか、そういった塊のようなものを私はどうしても許せなかったから。

途中から北村も加わり、何時間にもおよんだ大掃除は、疲労と達成感だけを残し、私の経験のなかで最も印象深く、最も気持ちの入ったものとなった。

日記はその掃除の最中に見つけた。日記はそこにあるのが当然といったように家の奥のほう、どこだか忘れたが家の奥のほうとしか言いようがない所にあつた。

母親が胎児をその身体の全てをつかって暖め守っているように、この古い家は全力をもってこの日記を包み込んでいた。それは力強く静かだ。日記を内包することは、細胞がミトコンドリアと共存するように、息を吸うように、疲れを癒すように、恋をするように、とても自然な行為に思えた。

土にまみれた草の色、そんな色をした日記を見つけてからというもの、飽きることなく何度も読み返している。

『生きていると、誰かから、なにかから期待されているように思う。そんなことないのにそう思い込んでいる。

押され、叩かれ、小さくかたくなっていく。

それが細かく砕かれ幻のように消えていく。

それは自分で招いたこと。呼ばなくていいのに招きいれてしまう。

本音は逃げたいと思う。自分が思い込んでいるいろいろなことから本当の音は「自由でありたい」

みんな私のことをどう思っているんだろう？

あの人はどう見ているのだろう？

好かれているの？

嫌われてるのかな？

今の私はワタシじゃない！

本当のワタシはこうなはず！

こんなんじゃないけな！

いっぱい、いっぱい』

なんの予定もない日曜日に、お昼を食べたあとゆっくり日記を読んだ。

夜に、風呂から上がり濡れた体にもせず、ビールを飲みながら日記を読んだ。

朝には顔を洗うように、毎夜、布団のなかで意識を手放すまで、緑の表紙の手触りを確かめた。

そんなふうに毎日のように日記に触れていると、日記がないと落ち着かなくなってしまうた。これが俗に言う依存症というものだろうか。アルコール依存、麻薬依存、タバコ依存うんぬんかんぬん。一冊の日記に依存しているというのは、聞いたことがない。

両親や長い付き合いの友達、お気に入りの散歩コース。そばにあって当たり前のものがないと寂しい。まあ、そんな感じ。一種の守りのようなもの。

そうこうして、日記が身体の一部のようになってくると、やはり気になるのは「誰が書いたのか」ということ。

弥生さんが書いたのだろうか。それとも弥生さんに近い人が書いたのだろうか。恋人、友人、いっしょに住んでいた人。どれも正解のように思え、どれもがピンとこない。そもそも日付もなく、何を言いたいのかわからない。へたくそな詩のようで、子供の落書きのようだ。

ただひとつ判るのは、日記のなかに出てくる”あの人”が、日記を書いた人にとつてとても大切だったということ。

そんな深い緑の一冊を私は日記と呼んでいる。書いた本人しかわか

らない思いの丈を綴ったもの、それもまた日記だと思っから。本当の理由はこれを日記と言うことが、なんだかしっくりきたからだけれど。

縁側に座り庭を見ながらぼんやりする。花が散り私の好きな「桜の木」になった桜が見える。あぐらをかき、髪を後ろで軽く結び、化粧もせずぼーとしている私。ご近所の人達からいったいどんな風に見えているのだろう。「女、捨てちゃっているわね」とか思われていたら、ちよつと嫌だ。

淡い色たちがこの家で踊り遊ぶ。混じりけのない黒が太陽にゆつくりと焼かれ、焦げた茶色になった柱。生命が溢れる緑の色が、力を使い果たした薄い畳の色。青になりそこねたコーヒー。毛が生え変わる時の白に近い茶色の犬。

桜の葉がいくつか舞い降りてくる。右に左にゆるりゆるり。犬が遠くの敵を狙う砲台のように咆えた。なぜだか、散り落ちた桜を見ていると喉が渴いてくる。

『桜の木に新しい葉が芽生え、やさしく元気な緑から穏やかで平靜な緑にかわる。』

その深くちよつとだけ暗いその色を、日常のひとつとして気にならなくなるころ、

すこし哀しくなる。

別れ際に「さよなら」を言われたときのよう。

それがゆつくりとからだ全体に広がっていく。

それを感じているのだとわかってくる。

ぼくはいつでもぼくだけれども、からだの中心にある、ぼくの核みたいなもの。

細くて猫の目のようなぼくの芯がポロリとこぼれ落ちる。失ったのだ、ぼくの大切なもの。

桜の花はぼくの宝物、おぼろげで硬く、やわらかで鋭い。

一枚一枚わずかに違う色をした花びらが、集まりかさなり広がっていく。

それが桜色。

ぼくの好きな色。

今年はおわってしまったけれど、また春が来れば花開く。

明日「おはよう」と言い合えるように。

綺麗に、たくさんたくさんすいこんで、どうどうと潔く咲き誇る。

がんばっていこう、大切なものがなくなってしまうたけれど。

ぼくは生きていく。

桜が咲くまで。

また会えるから。』

この日記を書いた人と私の、似てるところ、違うところをあげてみる。似ているのは、ふたりとも桜の木が好きなところ。違うのは、桜色した桜が好きなのこの人、緑の桜の木が好きなの私。そんなところ、同じところがあると嬉しくなり、違うところを新鮮に感じる。親しい友人に持つような気持ち。もっと知りたい。もっと近づきたい。恋にも似た好奇心。日記を見つけてから、いつだって、日記を書いた人への気持ちは変わらない。

そんな想いを胸に抱えつつ、この家に住んでからもう二年がたつ。いつも社会に慣れようと頑張ってきた。そうして月日は流れていくのだと実感した。日記のことを知る機会もないまま、何時の間にか時間が通り過ぎている。少しずつスピードを上げる時間。老いるということとは、こういうことなのかもしれない。

しかし、二年も興味が薄れないのは我ながらすごい。移り気な私にとっては快拳といってもいいくらいだ。会社に入る前から続いている恋人の省吾のことも、長くて半年しか付き合ったことがなかった私には驚くべきこと。けれど、時々不安になる。慣れは興味を無くすから。

時々、「恋の期限は二年間」そんなフレーズが頭に浮かんできた。そして、焦りともつかない不安が襲ってくる。そんな自分が嫌いだ。った。

この二年間、余裕を持って朝起き、最近お気に入りの大根の味噌汁をつくった。お茶をいれ、ゆっくりご飯を食べた。ちょっとしたものでも作りたてのご飯は美味しい。ゆったりとした朝が私は好きだ。戸締りをしっかりして、行かなければならないところに行く。仕事

をし、友達に会い、その日をすごす。怒ったり笑ったりときどき落ち込んだり。誰もがおくる日常。毎日が同じように繰り返していた。

初めて入った会社。社会人としての生活。忙しく、たくさんのことを覚えなければならぬなかでは、自然な自分を取り戻すのは難しい。私も社会のなかにいる間は、日記のことを考える暇はなかった。

けれど、ちょっとした空白の時間、ふと遠くをぼんやり眺めるような、そんなときに私は日記の匂いを感じた。それは私が子供のころによく嗅いだ、草や土の匂い。田舎のお婆ちゃんが住む家。懐かしい夏休みの匂いがした。

仕事の合間。取引先との電話を切り受話器を置いたとき。会議を終え、がやがやと部屋を出たとき。

恋人と過ごす休日。会話が途切れ二人でボーとしているとき。恋人と「またね」を交わし、自分の家に帰ろうと踵を返したとき。

慣れ親しんだ日々のなか、体から力がずっと消えるような瞬間に、その匂いが風に紛れてそっとやって来るのだ。

日常に日記が入り込んでいる。私の心に遠慮することなく入ってくる。なぜだか興味を持ってしまったもの。理由は判らないけれど、なぜだか深く繋がっているような気がする。

夕暮れの街は不思議だ。ビルの谷間にいると、谷底にある暖かい

村にいるような感覚になる。そこでは皆が優しく笑顔が絶えない。旅人もほとんど来ない辺鄙なところだけど、誰も文句も言わず、みんな自分なりの幸せを感じている。そんな街を歩く。

携帯で難しい話をしている、グレーの髪をなでつけた男の人。お店のショーウィンドウで、服装をチェックしている綺麗な人。弾んだ声で肩を寄せ合う恋人たち。すれちがうのは絵本のなかに迷いこんだ人々。なんだか懐かしいような、切ないような気持ちが溢れてくる。

世界に黄色の幕をかぶせると世界中の色がノスタルジックにかわる。黄色がかかった空の青。黄色がかかった木々の緑。黄色がかかったレンガの壁の茶色。とても綺麗だと思う。

薄い雲が、オレンジ色したサックスブルーの空に溶け、消えた。

『下校の時間 あの人がそばにいる

あの人を避けようとする僕

それでも隣にいるあの人

僕は視線を遠くの雲に向ける

あの方は僕に笑いかける

でも僕はその笑顔を見ることができない

僕があの人から逃げようとするのはなぜなのか

あの方が僕といつしよにいるのはなぜなのか

嬉しいのに辛いのはなぜなのか

なにかが僕の中にいる

牙をむこうと爪を研ぐ

これがなにかわらない
ただ、とても怖いだけだ』

*

残業が続いて忙しかった一週間が終わったあと、ふと弥生さんに連絡を取ろうと思った。

「二年もたって今更かな」

そんな事も考えたが、日記のことも気になっていたし、この家のお礼をちゃんとしたかった。

弥生さんとは、この家の鍵をもらうときに初めて会った。笑顔は少なかったけれど実直そうな印象を受けたのを覚えている。三十歳をこえて益々女盛り、凛とした美人だった。その時に、弥生さんの新しい住所と電話番号を教えてもらっていた。

少し弥生さんのことを話そうと思う。弥生さんは私にこの家を譲ってからすぐ、勤めていた英会話教室に休みをもらい旅行に行っていた。私がこの家に越してきてすぐに種発していたので、お礼をしようとして職場を訪ねたときにはすでに出発した後だった。不在だったのですぐに帰ろうと思ったのだけれど、その教室を経営している林さんという方にお茶に誘われた。私も弥生さんのことが聞けると思っただけで、渡りに船だった。

林さんは、見方によって、上品にも豪快にも見える不思議なおばちゃん。率直に言ってそんな印象を受けた。その林さんと、近くの

喫茶店に入った。どうということもない普通の喫茶店だったけれど、天井からヒモでぶら下がっている木彫りのドードー鳥がいやに存在感を漂わせていた。

使い込まれた椅子に座り、オーダーしたアイスコーヒーが来ると、林さんは居住まいを正した。

「貴方みたいな若い子が、弥生ちゃんを訪ねてくるなんてすごく意外。弥生さんいますか？てあなたが言ったとき、返事するのにちよつと間があつたでしょ。私、ビツクリしちゃってね。弥生さん？弥生さんてあの弥生ちゃん？て頭のなかで考えちゃった。」

林さんは、私おどろきました、と体全体で表していた。感情表現の上手い人だ。

「弥生さんに誰かが訪ねていくと意外なんですか？」

「そういうわけじゃないけど、弥生ちゃんだしねえ」

まだ納得しかねるのか、うんうん唸っていた。

「弥生さんて、いつもはどんな感じなんですか？」

この際だから、私は弥生さんのことを聞いてみることにした。

「あら知らないの？弥生ちゃんに会ってきたのに？」林さんが言った。

「弥生さんを訪ねてきてあれですけど、実はあまり知らないんです。」

「私は正直に言った。」

不信に思つたのか、林さんはこちらを見定めるように見詰めてくる。ほんのすこしの無言の時間がすぎると、

「弥生ちゃんのこと話しても、あなたならいいか」

林さんは顔をゆるめ言った。

「いいんですか？」

実際、自分でも怪しいかなと思つていた私は尋ねた。

「いいのよ。なんだかあなた弥生ちゃんに似ているし。」すごく気

になる言葉。

「似ている？どのへんがですか？」私は言った。

しばらく考えたあと、良い言葉が見つかったのか、林さんは笑顔で答えた。

「そうねえ。なんだか固くて口下手そうなところとか。嘘をつかなそうなところかしら。かなり当てずっぽうだけれどね。」

その時の林さんは、まるで悪戯を思いついた子供のような顔だった。

だいぶ打ち解けた私達は、かなり長い間、話をしていた。とは言っても、林さんがほとんど喋り、私は相槌を打っただけだったけれど。

弥生さんは、お茶を濁したり、含みを持った言い回しをせず、はっきり自分の意見を言う人。林さんの弥生さん評。けれど、冷たい感じではなく、ただただ実直で正直なだけなので、評判はとても良いらしい。本当に時々、とても明るい笑顔になることもあるけど、それはすぐに引っ込んでしまい、その笑顔はとてもレアなのだそうだ。

「こんなところも、あなたに似ているかもね。」意地悪な笑顔を浮かべ、林さんは言った。

そろそろ出ましようかと林さんが言ったのは、二時間近く話し込んだ後。アイスコーヒーの氷はすっかり溶け、グラスのなかには不思議な色をした液体が残った。薄めたコーヒーがアメリカンなら、薄いアイスコーヒーはどう呼ぶんだろう。アメリカン・アイスコーヒー？それともアイス・アメリカンコーヒー？

お会計は林さんが払ってくれた。楽しい時間のお礼なのだそうだ。喫茶店のマスターは、二時間も居座った私達を、嫌な顔ひとつせず「ありがとうございました」と送ってくれた。それだけで、すごく

良い店だと思う。へんなドードー鳥はいるけれど。

帰りの道すがら、

「だいぶ話したわね」と林さんは上品に言った。

「聞き上手ねあなた。そんなところも弥生ちゃんに似ているわ。口下手だけれどね。」からかうような笑顔で言った。

口下手はよく言われるけれど、聞き上手は初めてだ。

英会話教室を訪ねた後2、3ヶ月は、何度か弥生さんに電話をしたけれど繋がらなかった。段々、私から電話をかけなくなり、結局、弥生さんからの連絡もなかった。

そうして二年がたち今に至る。

週末、私は家でごろごろすることが多い。恋人の省吾が忙しく、休みが合わないのが原因。私は一人の時間を楽しめる人だし、省吾に会えないことで寂しさは感じなかった。長く付き合つとそんなもんかなと思う。

冷凍庫で冷やしたグラスにビールを注ぐ。畳に寝転がり、読みかけの小説を自分の横に積み上げる。あまり小説の内容が頭に入らなかったり、縁側から台所へ通りぬける風が気持ち良くて寝てしまったり、ビールの飲みすぎでふわふわになったりした。そうして私の週末は過ぎていく。作家の名前はほとんど知らないけれど、本は好きだ。

私は”しなければならぬこと”をするとすぐ疲れてしまうので、何かした後は一人でごろごろしたり、ごろごろしたり、いつもしていた。冷たい水で顔を洗い眠気をとるように、私にとってそれは当たり前で必要なことなのだ。休みの前にはいろいろなものが私の中に溜まってしまう。それは学校の授業で無意味にグラウンドを延々走らされたあとの、達成感とかそういうもののまったくない疲労感に似ている。子供のころバスケットボールが好きだったのだけけど、部活というものにはいつてすぐに嫌いになった。

好きだったものが“しなければならぬこと”になってしまったからだ。私はそんな子供だった。

本とビールをお供に、弥生さんに何度も電話をしたが、いつも繋がらない。寝転びながら受話器を耳に当てているので、たぶん肘には畳の跡がついている。庭には相変わらず太い幹の桜の木。ちりりりん、ちりりりりん。なにも考えずに桜の木を見ながら、呼び出

し音を聞いている。瞼が目を開けることを放棄しているように眠い。
なぜかとても穏やかな気持ちになった。

『正常と異常をくりかえす

行ったり来たり行ったり来たり

黒い羽を集めてつくったコートをまとい

壁に囲まれたここから出よう

私のなかにある 狂った傷跡

子供たちが歌う

白と青の友達をさそい

緑の葉が覆いつくした壁に梯子をかけ

ここから外に出る

神父が言う「どこの天使が降りてきたんだ」

私が言う「どこのバカだ」

あなたが歌う

心地良い時

黒い傘を放り投げ塀から飛び降りた

黒い羽が飛び散った』

週末しつこいほどに電話をかけたけれど、弥生さんはつかまらなかった。月曜の会社から帰ってくるといつもホッとする。火曜日、水曜日、木曜日の会社より少しだけ疲れる月曜日。週末の自分から

会社にいる自分にかわるのが大変なのかもしれない。

桜の葉の隙間からのぞく月を見る。化粧おとしもそこそこに、玄米茶を飲みながら、縁側に座る。ほんの少しだけ右側が削れている月。満月になりきれない月。風が吹くと枝が揺れて、出来の悪い月を隠した。

しばらくそうしてボンヤリしていたけれど、どうも落ち着かない。いつもは月や桜を眺めると、とても穏やかな気持ちになったのに。弥生さんにお礼がしたい。週末に突然思いついた名案は、依然として私のなかで燻っている。誰かにお礼をするのは、誰かに笑いかけることの次ぐらいに素敵なこと。胸の奥のほうでパチツと音がし火の粉があがった。

弥生さんに電話して「ありがとう」と上手く言えました。となればいいのだけれど、自分の気持ちと現実がリンクしないのはよくあること。弥生さんはやっぱりというか電話にでなかった。しかし私のなかの火は、そんなことではへこたれない。ノリと勢い。折角なので、たまに連絡を取り合う親戚のおばさんに、弥生さんのことを聞いてみることにした。

弥生さんとは違いおばさんはすぐに電話に出て、受話器からは、「久しぶりね。あなたから電話くれたのって、はじめてじゃない」とはしゃいだ声を聞くことができた。

親戚の恰幅の良いおばさんは人懐っこい人で、愛想の良いとはいえない私を昔から気にかけてくれていた。この家に越してきてから初めてかかってきた電話は、私の親ではなくこの人だったぐらいだ。こんなに喜んでくれるならたまに電話をするのも悪くない。跳ねるようにリズムカルな声を聞きながら私はほんのり嬉しくなった。

あなたから電話が珍しい。という話を驚きと喜び混じりにおばさんは言った。最近はどうな生活をしているの。そんな他愛もない話をけっこんな時間しゃべったあと、

「最近、連絡とってないから判らないけど、どうもまた旅行に出かけたらしいわよ。今度はどこに行っているのかしらね」という返事が返ってきた。

残念また空振り。私は名探偵にはなれないみたいだ。

「彼氏とはうまくいつてるの」突然おばさんが言った。

弥生さんの消息がつかめず、気が抜けていたのでビックリしてしまった。おばさんに省吾のこと話したことあったっけ？ 実際、恋愛話は私の苦手な分野。恋の話が大好きな友達の沙希には、いつも困ってしまう。そういえば最近、省吾の声を聞いていないな。そう思った。

「まあ、普通ですよ普通」

当たり障りのない返事を返し、私はその話題を誤魔化した。

「逃げたわね」おもしろそうな声。

なんだか私のまわりには、自分らしく歳を重ねた素敵な女性が多い。そんな気がする。

おばさんの「生きている」という感じの声を耳で楽しみながら、さて誰に聞いたら日記のことがわかるのだろうと私は考えていた。

『ひだりらせん
左螺旋の人』

太陽をよけ 雲を渡り島につく
風が螺旋の身体を通り抜け

花びらがくるくると舞い上がる

木々が頭^{こづか}をたれ

草原が螺旋の身体をやさしく受け止める

やっとたどり着いた孤島

狐が休むことなくダンスを踊る

疲れ切ったら線の身体

獣の心が大地を裂く

ゆっくりと癒されるのを

見守る水たち

左螺旋の人

青の欠片を求め走る

草花の群れをくぐりぬけ

泡立つ空気を巻き取っていく

左螺旋の光を引いて

届け狐の瞳^{こころ}』

人と人との関わりのなか、ちょっとしたすれ違いやわずかな誤解が生まれる。世の中に嫌というほどおこっていること。

このところ私のなかには、そんな他人にとってどうでもいい、当人達にとってお腹が痛くなるような問題が、雪の降り積もるように増えていった。

些細なことから省吾とケンカをし、関係がこじれた。厚く積もった雪が足を取り、私の歩みを遅くしていく。どうにかすればいけないのに、その術を知らない私はただただ流れに身を任せるだけ。歯を犯す虫歯のように、早くしないと手遅れになる。疲れた身体、晴れない心。それが職場での人付き合いや、友達との関係にも悪い影響を及ぼした。

「なんか言ってくれよ」

省吾の言葉。この言葉から、いつも言いたくて言えなかったのだと感じた。

またか。そう思う。私はあまりしゃべらない。どんなことを話して良いのかわからないし、自分の、嬉しさや悲しみを伝えるのが苦手なのだ。自然と自分の気持ちを表に出せる人が羨ましい。物足りなさや寂しさを、言葉少ない私は恋人に感じさせてしまう。心理学では、一日に男は2000語、女は4000語話すと満足する。そんなことを前に見た雑誌に書いてあったが、私には1000語でも多いくらいだ。

コミュニケーションが極端に下手な私に、なにができるというの

だろう。

夜、テレビをぼんやり見る。

いろいろなことを考えすぎて、身体の中から強い気持ちが染み出していく。カラカラの身体をめり込ませるように、古い壁に寄りかかった。動きたくない。なにもしたくない。

しばらく死体のようになっていたが、人の頭はいつも働くようにできているらしい。考えたくもないのに、嫌なことが浮かんでくる。こんなときぐらい休んでいてもよいのに。

他のことを考えようとする。とはいえなかなか代案がなかなか思いつかない。風がガラス窓の横をすり抜け、ガタガタという音が家の中で鳴った。テレビを消し音に耳をかたむける。この家で私はひとりだ。

ため息をひとつ。代案を探すのをあきらめ、いつもそばにある日記について考えることにした。

まず意味がわからない。

具体的に書かれていることはあの人のことだけだし、小難しい文章と幼い子供のような言葉の羅列のみだ。詩人のつもりだろうか。

神経質なんだ。そうに違いない。実際これを書いた人がいたら、いつしよにいたくないと思う。細かい人は嫌いだ。

とはいえ、そんな人の書いたものを、好き好んで読んでいる私はどううなのだろう。

ぼん、ぼん、ぼん。12回。柱にかかったゼンマイ式の時計がな
った。その音は思考の海で溺れている私を助けてくれた。なんてア
ホなことを考えていたのだろう。現実には救出された私は、空腹感に
襲われた。ため息をひとつ。そういえば帰ってきてから何も食べて
いない。

『マッチ一本 タバコがじゅわり

もくもくもくもく ドーナッツ

頭のうえで浮かんでる

もくもくもくもく 入道雲

吸いすぎに注意しましょう

もくもくもくもく わたがっし

甘いあまい思い出

もくもくもくもく ふーとひといき

風になる

もくもくもくもく 好きな人

大切なあなたの思い

大嫌い

人にやさしく
『

人にやさしく。そうだよなあと思う。

すこしだけなんとなく元気が出た。

春。この日記を書いた人の名前。この日記のことはひとつもわからない。けれど日記をくり返し開くうちに、名前さえない、判らないというのが失礼な気がして私が名前をつけた。二年も付き合えば、情のような親近感のようなものが湧いてくる。一番いっしょにいる時間の長い人。春。

省吾との関係が悪くなってから一ヶ月。弥生さんも連絡がつかず、私の耳には電話の呼び出しの音が鳴り響いていた。何度か親戚のおばさんに聞いても、弥生さんの行方はまだ判らない。

省吾とは今でも上手くいっていないが、時間は私に冷静さを取り戻させてくれた。周りの人たちは、私に何か起きたことをなんとなく判っていたのだろう。私を避けるのでもなく、深入りすることもなく、ちょうど良い距離を大切にしてくれた。よしっ頑張ろう。やっぱりダメだ。心がくり返す。空気で毎日を過ごす。そうしていくと、拗れていた人間関係も徐々にだが良い状況に戻っていった。皆にすこしの感謝。

春。どんな人なのだろう。名前をつけると想像はふくらんでいく。やさぐれていたときは失礼なことを考えたが、落ち着いてみると、好意的なディテールが浮かぶ。どんな姿だろう。どんな制服を着て授業を受けていたのだろう。グラフィックアートは好きだろうか。ノーマン・ロックウエルは好きかな。どんな声をしているのだろうか。顔は。瞳の色は。指先は細くきゃしゃで美しいだろうか。そんな春をつくるものたち。

お腹が空いてきたので、オムライスをつくることにした。鶏肉やタマネギのみじん切りをいれケチャップライスをつくる。卵にはつなぎを何も入れず、丁寧に半熟に仕上げる。焦げ目ないレモン色のオムライス。宝石のように綺麗だ。大泥棒が盗みにくるかも

しない。

雨上がりの澄んだ風が、私の髪を撫でていく。誰が触っていいよって言った？そう意地悪なことを考えた。外は雨が上がったばかりで、太陽が地球を照らしている。空には絵本にでてきそうな雲がふたつみつ。冷えた空気が家を包む。綺麗な小川の水のような冷たさが、肌の境界線をはっきりと意識させた。

『新緑の渦に巻き込まれた私は、細いとても細い杖、それ自体の名前からくる役割をとってい果せないであろう、その乳白色の杖だけを持ち、猫の目の洞窟を目指す。』

そこはさまざまな黒色の人々があふれ、それは茶色の入った黒だったり、青のきいた黒だったり、疑いようもない黒だったりもした。思い思いに動き、幾何学の美しい図形を何かしら描いているのだ。私は黒のざわめきを抜け、模様に美しいアクセントをつける。そこにあるのはやさしい受動性であり、はっきりしない暖かさだ。

だが

目的地の方向はわかるが、その最終地点は、具体的にもなんとなくでも知るにたがう。

しかし私は、ひたすらに考え選択をくりかえし、力強く歩くのだ。

ただ純粹性を身体に宿しつつ』

「お久しぶりね。元気にしてた。」

朝も早く、受話器から明るい弥生さんの声がする。

「いま鹿児島に来ているんだけど、いいわよ桜島。お土産買ってこれから期待しててね。で、そっちの住み心地はどう？」

弥生さんの声だ。私は布団の中で夢と現実を行ったり来たりしていた。朝霧がかかった頭では、弥生さんの問いかけに、いいよと頷く

ことしかできなかった。

「寝ぼけてたね。」

やっと目が覚めてきたとき、弥生さんがくすくす笑らわれてしまった。今思えば、よく弥生さんだと判ったな私。久しぶりの声。それもトーンが全然違うのに。

突然の電話に私は戸惑ってしまったが、明るい感じの弥生さんに思いのほか打ち解けることができた。話したのが人生で二回目なのに上出来だ。もちろん最後まで、興奮し、混乱し、冷静にはなれなかったけど。そうして一通り家の生活について喋ったあと、私は日記や春のことを話すことにした。

「春。いいわねそれ。」

これから私も春と呼ぼうと嬉しそうに同意してくれる。

弥生さんの優しい声に安心した。寝癖のついたボサボサの髪の毛を触る。腫れぼったい瞼を擦る。気持ちをしづめて、そうして好奇心の赴くまま春のことを尋ねた。

「ええ。その日記を書いた春のことは良く知っているわ。」

弥生さんははっきり明るく話す。純粋な陽性の心。林さんや親戚のおばさんから聞いていた、落ち着いた実直そうなイメージは、良いほうに裏切られた。

そして、弥生さんと話していると、不思議な心地よさを感じた。

明るい人のなかには、あなたも元気にしなさい、という明るさを押し付けてくる人がいる。それは無意識なのかもしれないけれど、そういう人が傍にいと、静かな人は疲れてしまう。

弥生さんは違う。私が何か話そうとしたり言うことを考えていると必ず待っていてくれる。なんというか弥生さんは一人一人のリズムを大切にしてくれる人なのだ。例えば、忙しい人とゆったりした人がそのままでいられる空間。気を使わず、無理をせず、一緒にいられる不思議な空気。短い付き合いながら、私は弥生さんに好感を持っていた。

「春の日記すごく暗いでしょ。僕は何をしているんだ。怖い怖い。」

暗い洞窟のなかを歩いている。疲労した右足がやせ衰えている。そんなものばかり。子供みたいなものもあったけど。春はね、すこし心が壊れていたの。言葉は悪いけど、ほんとそんな感じだったみたい。春のご両親から聞いたから本当のことよ。それで精神を患った人のための施設にはいたりしていたの。その頃は、心の病に対する偏見があったから、なんと言うか収容所？そんな所だったみたい。」

私は頷き話を聞く。弥生さんは長い話を、ひとつひとつかみ締めるように大切に声にする。暗い話なのに、弥生さんが言うとなんかに悪いことに聞こえない。本当に不思議な人だ。

「施設に入る前は、私と春はよく遊んでいたのよ。二人とも高校生。もう18年前になるかな。」

私は、弥生さんが春の“あの人”だと確信した。陽性の弥生さんと陰性の春。

そのことを聞くと弥生さんはあっさりと、

「そう。春の好きだった人は私。」

初恋をした少女のように、恥ずかしそうに答えた。

なぜそんなに綺麗な声で春を語れるのか、わたしにはわからない。けれど弥生さんに尋ねることはできなかった。

なぜなら日記にはこう書かれていたから。

『あの人を殴ってしまった

殴ってしまった

殴ってしまった

もう会えない

こわいこわいこわい 自分がこわい

拳があの人を頬を殴ったあと気持ちが悪かった

自分がこわい

あの人を壊したい殴りたい

もうあの人に会えない会えない会えない
『

省吾と別れた。

その原因は私。私は自分から言葉をだそうとはせず、なにかを話しても短いとても短い言葉だけ。それだけで相手がわかってくれるのを期待する。コミュニケーションの一方通行。私が話するときそこにはちいさな誤解が生まれるのだ。伝わらない、伝えてこない、それらが両者を不安にさせる。黒いものがどんどん積もっていく。そして破裂したのだ。

今まで騙し騙しやってきたことが集まって、取り返しのつかなくなっていた。いろいろなところが破れ、いたるところに綻びが溢れかえる。私なりに気持ちを伝えようと努力し、彼と何度も話し合った。どれだけ私が貴方を想い必要としているか、私なりに一生懸命に彼にぶつけた。それは普段の私には考えられないことだった。それでも、もう直すことができないところまできてしまっていた。

省吾との出会いは友達の沙希の紹介。大学を卒業し彼氏もつくらず、ふらふらしていた私を心配した沙希が気を使ってくれたらしい。ひとつ年上の省吾は、そのときちゃんと会社に勤めていた。それだけで私は、省吾に真面目そうな印象を持った。大学を卒業してから一年間、自由に過ごしていたけれど、どこかで不安を感じていたのかもしれない。それと、すごく優しそうだなと思った。

それから私達はよく遊ぶようになった。仕事を抜けてきた省吾と二人でランチを食べたり、沙希の彼氏の青木さんと四人でお酒を飲んだり温泉に行ったりもした。恋人ではないけれど、会えば楽しい関係。頻繁に電話をする間柄。

夏が終わった秋に、私と省吾の二人で沖縄に行くことになった。最初は沙希と青木さんも行くはずだったのだけれど、当日、沙希が熱を出し行けなくなったのだ。青木さんも看病のため不参加。私と省吾も、旅行を取りやめようと思けど、沙希が気を使って、

「私のことはいいから楽しんできて。キャンセルしてもお金帰ってこないし、もったいないよ。ガジュマルの木も待ってるしね」そう微笑んだ。

私も省吾も「ガジュマルの木が待っている」という沙希の言葉に、ものすごく心を惹かれてしまった。そうして結局二人で行くことにした。

出発の前、

「頑張つてね」と熱で赤くなった顔で言う沙希。本当に恋が好きなんだな、この子悪魔は。

けれども、省吾を勧めてくる沙希には申し訳ないが、その頃の私は他に気になる人がいた。習い事で行っていた琴の先生で40歳手前顔がカッコいいとかお洒落とかではなく、ただ単に雰囲気が好きだったのだと思う。妻子持ちだったけれど、一度でいいから床を共にしたいと強く想っていた。

省吾と二人きり旅行を気楽に行けたのは、まだお互いに恋愛の対象と見ていなかったからだと思う。仲の良い友達。ただ性別が違うだけで、決して男と女ということではなかった。

この旅行が二人の恋のきっかけ。私達はそこで毎日のように何かに感動し、お互い惹かれあうようになっていった。

沖縄特有の植物の瑞々しさや潮の強い香り、美味しい独特な料理やそこに暮らす人々の笑顔。海の中のヴィヴィットな色の魚たち。ガジュマルの木。ひたすらに感動した。そして私達は、バカみたいに青い海に夕日が沈んでいく圧倒的な光景に出会うことになる。

空と海の境がわからないほどの濃い青の世界が、太陽が降りてくることで、様々な色を生み出す。赤、黄色、緑、青。水平線から大きな虹が光を放つ。二人は呆然とそれを見ることしかできなかった。

その日私達は、胸を打たれた景色について延々話し、はしゃぎながら泡盛を飲み、そこにいることができた奇跡に互いに感謝した。そして、その夜に彼とセックスをした。同じ瞬間のなかに存在したという、なにか共犯者のような連帯感がお互いを求めあうものになっ

たのだ。

それが二人の恋の始まり。

そこからずっといっしょにいた省吾はもういない。「失ってから始めてわかる」使い古された言葉。使い続けられている意味が初めて判った。私の一部分がなくなっていく、それが確かなものとして実感できる。それほど彼の温もりが大きかったのだ。心に海で見た珊瑚のような穴を空ける。これをどうしたらいいのか私にはわからない。ただわかっているのは、自分のことでさえわからないのに他人のことなんてわかりっこないってこと。

空に手をまっすぐに上げる。太陽と雲が混じりあう白と橙のアイスクリーム。初夏の晴れに雪がふる。指先に風を感じる。私はその流れを掴みたかった。

『右手にはマーブル模様の僕の半分がある

とてもなめらかで、ほんのり冷たく、その感触はとても手になじむ

あるときすこしだけ大きくなり

あるときにはビー玉のように小さくなる

それはまるで、黒い犬の黒い瞳のようだ

黒い犬は大地を駆け、たまにぐでんと休み、無垢に花の匂いを嗅ぐ

左手の黒い犬

ときにさわがしく、ときに静かに

嬉しそうに哀しそうに

真直ぐ前をむいてもぞもぞ動く』

*

やらなければならぬことを冷静にこなしながら、心になにかを
引きずって過ごしていたそんな時。前触れもなく手紙が届けられた。

省吾を失ってから一月がたつ。

誰かに甘えたり、悲しみをぶつけたりできない私は、好きな小説を読んだり、庭の桜の木をただ眺めたり、友達と買い物をしたり、普段と変わらないことをしていた。

珍しく北村とお酒を飲みに行ったりもした。慰めるのでもなく励ますでもない態度は、私が元気になるのを焦らず待っていてくれているようで嬉しかった。

感情や気持ちいろいろなものが動かない私。哀しいとわかっているのに、哀しいと感じられないジレンマ。そんななか久方ぶりに心が動くということを知った。それは弥生さんからの手紙。
中身は春だった。

初めの部分をすこし読んだあと、コービーを煎れることにした。それはとても丁寧に書かれたとても長いものだったから、私も全力で弥生さんの手紙と向き合おうと思ったのだ。

豆を挽くと香りが生まれる。沸騰したお湯をすこしだけ冷ます。挽いた豆をペーパーフィルターにいれお湯を落とす。部屋の上のほうにこげ茶色の香りが浮かんた。

「突然の手紙、ごめんなさいね。いま古い旅館の畳の部屋でゆっくりと、この手紙を書いています。この前あなたと電話で話してから春のことがいろいろ浮かんてくるようになって、それを言葉にしたいと思ったの。春の仕草や目をそらすときの癖。公園で話したこと。寂しそうな笑顔。ちよつとした思い出が、本当にたくさん鮮明に浮かんてくるのよ。それをあなたに伝えたくて手紙を書いています。あなたはとうしてと、不思議がつているかもね。それでもあなたに

春のことを知って欲しかったのよ。そう思うのは私自身なぜだかわからないけれど、できたらこの手紙を読んで欲しい。たぶんとても長いものになるけれど、これが春です。私の覚えている私の春です。

十数枚にもおよぶ手紙のなかで春の小さな欠片が舞う。春の身長。春の好きな料理。はるの癖。春の好きな音楽。春の足の大きさ。春の鼻。春のまつ毛。春の好きな色。春の名前。春の人生。

弥生さんの記憶のなかで今も生きている春。それをひとつひとつ大切にすくい上げ、細部までも的確に書き表していく。掌を太陽にすかして見る。そしてその手なかの血の流動までも画用紙に描いていく。右手にはクレヨン、それでも余すところなく描いていく。写实的なそんな手紙、飾り気のない言葉は弥生さんの細胞の記憶を紐解いていくように思えた。

どんな気持ちでこの手紙を弥生さんが書いたのかはわからない。春を思い出として受け入れるために必要な作業だったのかもしれない。春のいない時間が流れていくなか忘れないために書いたのかもしれない。たぶん弥生さん本人もわからないだろうけど。ただ言えるのは、弥生さんにとって春はとても大切に唯一の人だったこと。そして春と恋をしていたこと。

弥生さんの誠実な言葉が、固まっていた私の扉を開いていく。すこし開いた私の心に、春が自然に入ってくる。それはとても暖かかった。弥生さんのなかの春が、私をふわりと抱きしめる。涙を流さず泣いている私を、優しく慰める。幼い頃、転んで泣いていた私に、擦りむいた膝小僧をふうふうしてくれた母さんのように。

私は自分のことを考えようと思う。私は目を開けようと思う。私

が私のなかで変えたいと願うものと、残したいと感じるものを見極めるために。いろいろなことを。今よりすこし前に進むために。

私が一番好きな春の日記がある。そのページのあとは白紙になっているので、きつと春が書いた最後の日記。それは私が暗い春の言葉を何度も何度も読み返すようになったきっかけになったもの。そこには春のありったけの生命力や、全身全霊の思いのたけが溢れている。

『本能からくる声

中心が丸くくりぬけた心が叫ぶ

いえなかった言葉

好きという言葉

血まみれの身体、包帯が薄汚れ、咳き込み血を吐き出す

ボロボロの身体を引きずり

それでもいえなかった言葉

好きという言葉

僕の優しい部分が あなたを好きです

あなたを傷つきたいと思う僕は あなたが好きです

あなたに会うと笑顔になる僕が あなたを好きです

自分だけの物にしたいと欲望を抱く僕は あなたが好きです

僕の全部をかけて

それが想いの全て

あなたは知っていますか そばにいてくれた人を

あなたは覚えていますか 心配してくれたことを
わたしは知っています 覚えています
この手で抱きしめられるぐらいに

ありがとう

頭をなでてくれて

ありがとう

赤い花をそえてくれて

ありがとう

生きていてくれて

ありがとう

ここにいてくれて

言えなかった言葉

忘れられなかった人

好きという言葉

底辺がつくられた時代

好きという思いの上に積み上げられていった

言えなかった言葉

忘れられぬ人

大好きだったあなた

送ったかった言葉

好きという言葉』

「そう。それを書いた日に、春は死んだのよ。」

冷静に私の耳に伝わる。弥生さんからの二度目の電話。

夜の匂いがあたりを包む。月灯りにてらされて屋根から影が落ちる。ひんやりとした空気が肌に触れ、私を等身大に形作る。心が肉体におさまったりアルな私。真夜中にできる光と影との境界線が私は好きだ。それは太陽がつくるはつきりした影より、やわらかくも優しいから。

病気などによる身体的な死亡、精神的からくる自殺、そのどちらでもなく春の死因は今もわかっていない。風船から空気が抜けてしぼんでしまうように、春は静かに息を引き取ったそうだ。

私はこのことを手紙を読んで知っていたが、人の声、それも弥生さんから聞かされると生々しく直接的に感じる。

「まあ。このページの日記にも日付もないし、私が勝手にそう思っているだけだね。あなたもそんな気がしない？」

悲しい話をしているはずなのに、弥生さんはなんだか悪戯っ子のように言った。

「ええ、きつとそうですね。」

私も素直にそう思った。

春は最後の日記にめいっぱい力をいれて気持ちをごめて、自分なりに満足したからのんびりしようとしたのだ。きつと。そこには悲壮な思いなど微塵もなく、ただ疲れたからそのまま休んでしまっただけ。とても健やかな眠り。

「弥生さんひとついい？」

私は聞きたかったことを尋ねた。残る疑問、私にこの家を譲ってくれた理由。

「その家はね、もともとは春の家だったの。それを春のご両親から頂いたのよ。」

弥生さんはゆつくりと昔を思いながら。

「何から話そうかな。」

とても丁寧な言葉を紡いだ。

「実はね、春は二年ぐらいかけて日記を書いたのよ。枚数少ないし、ひとつの季節が過ぎる間に書けそうだけだね。春は“施設”に一年近くいたから、計算するとだいたい二年ぐらいになるの。どお、驚いた？」

たしかに薄い緑色した日記は、季節が変わる短い間だけで書けそうだった。

「原因もわからずに春は死んだから、やっぱり春のご両親も滅入っててね。お葬式やいろいろ片付いて少し落ち着いたあと、ご両親はその家を手放して遠い街に引っ越すことになったのよ。春を、はやく思い出にしたかったのかもね。本当に春はあっさり死んじゃったらしいから。」

大人のはずの弥生さんの声が、なぜだか無防備な子供の声のように聞こえる。

「春がまだ生きてるときご両親とは何度か会ったことがあって、春と私が仲が良いのを知っていたから私に家を譲ろうと思ったらしいの。春との思い出が詰ったこの家をお金にかえたくない、けれどこの家を手放したい、忘れたいから。てね。」

今思うと驚きよね。譲渡に必要な税金とかも春のご両親が払ってくれたし、普通ないことだもの。でもね、そのときは私がこの家に住むんだって自然に思えたわ。」

ちよっとした無音のとき。弥生さんの話を私に染込ませる

「私を殴ってからすぐに春は“施設”に入っちゃって、次に会ったのが春のお葬式。言葉なかったわよ。殴られてから音信不通になって、春の家に電話をしてもいつも留守だったし、不安や寂しさを誰にもぶつけられなくて、私の思いをどうしたらいいのって思ったわ。私、嬉しかったのよ、春に殴られて。もちろん怒ったけど、私、他の男の子と仲良くしていたのが原因だし、好きとか一度も言って

くれなかったから、やきもち焼いてくれたんだって嬉しかったんだ。へんかな？」

弥生さんはおどけたように言った。

「うっん、全然へんじゃないよ弥生さん。でもどうして、そんな家を私にくれたの。大切なものだったんでしょ？」

私はよけいに不思議に思った。

「私は春だけを想って生きてきたわけじゃないのよ。春の家に住んでから何人か恋人もできたし、幸せを感じたこともあったわ。でもいつも物足りなさが付きまとうていた。春じゃないってね。だからこの家を手放そうと思ったの。春のご両親のように、春を思い出にするために。」

弥生さんは穏やかに言う。

「どうして私なの？」

本当になぜだろう。

「聞いてくれる。あなたと私と春の家のこと。大層なことではないけれど、私にとってはとっても大切なお話。」

そして弥生さんは語り始めた。淡々と何かを噛みしめるように。

「春の家をご両親に頂いてから、私はすぐには引越さなくてね、高校を卒業するまで待つてたんだ。さすがに、あなたのお爺ちゃんお婆ちゃんが許してくれなくてね。早く住みたかったけれど、半落ちよつとだったし我慢したわ。それから春の家にすむようになって、私、カチコチに固まってしまったのよ。」

カチコチ？

弥生さんは苦笑いをするように言う。

「そうカチコチ。そのころ私、顔に表情がなかったんだ。感情が上手く表現できない。無表情でカチコチ。誰に会ってもみんな驚いていた。私の顔を見た瞬間ぎよつとしていたもの。あなたのお母さんもね。私、何かに怒ることはなかったし、声を上げて笑うこともしなかった。泣くこともできなかったのよ。春が死んだのにな。」

弥生さんは静かに言った。

遠い昔の話。けれど、弥生さんの心の奥底にある小さな痛みが伝わってきた。

「そんなとき姉さんに連れられた、あなたに会ったのよ。桜の花も全部散ってしまって、綺麗な黄緑の葉がたくさんついてたところ。土の上に桜色の花びらがすこし残っていたぐらいだね。あなたは六歳ぐらいだったかな。この家に入るなり、私のことなんかほっておいて庭に飛び出して、『この木なあに？この木なあに？』って凄いい勢いで聞いてきたの。初めて会ったのに、私のことなんて全然気にしないで、ちよつとビックリしたわ。それで私が桜の木だって教えてあげると、あなたはちっちゃな手をめいっぱい広げて木の幹に抱きついたのよ。『桜の木』ってとても愛しそうに呟いて。あなたは桜の木のことしか頭になかったんだろうね。すぐ満ち足りた顔をしていた。私、そのときのあなたがすごく色っぽく見えて、この子はこない顔で恋をしていくんだろうなって思ったわ。そしたらなぜか涙が出てきたの。やっと泣けたのよ。すぐに止まってしまったけど、ゆっくりと身体中に染み渡るように、それは優しく私を満たしてくれたの。」

弥生さんはそう話を結んだ。喜びと幸せ、切なさと哀しみ、すべてを受け止めたとても澄んだ声で。

私は涙がこぼれた。

あれから一度足りとも泣くことはなかったのに。

泣くことはいいことだ。涙は悲しみをすこしづつ洗い流してくれる。喜びのあまり涙する、悲しみのあまり涙が頬をつたう、人のとても素敵な機能だ。哀しくても泣けなかった私。泣くことが恥ずかしいこと、悪いことのように思っていた。

手のひらに落ちる涙。やっと傷つき疲れた自分を許せたのかもしれない。

「それから春の日記を見つけたのよ。私にとって春からの恋文。それが春と私の物語。」

弥生さんの声、私は大好きだ。

人間はひとりぼっちだ。

弥生さんの哀しみを知ることとはできない。春の苦しみを味わうことはできないし、もちろん、私の喪失感で誰かの心が傷つくこともない。自分の問題は自分で解いていかなければならないから。

けれども、誰かが泣いている私を少しでも暖かくする。誰かが切りさかれた私を少しだけ癒してくれる。誰かが動けないでいる私の背中を押してくれる。みんなのなかにいること。

私はひとりぼっちで生きていく。今よりちょっとだけ幸せになるために、みんなと一緒に歩いていく。

うだるような暑さ。夏の日に、春の詩を見つけた。

セミの声がそこいらじゅうに響き渡り、汗という薄い膜が体にまとわりつく。

何の気なしに見つけた春の言葉。なぜ見つけれなかったのか、今でも不思議に思う。あんなにそばにあったのに。

こっそりと、なんか恥ずかしそうに、春の詩は日記の表紙の裏に落書きのように書かれていた。

それは春の望み。

ささやかな希望。

『なんどものぼる坂
猫といっしょに歩く

猫の足は曲線をえがき
なめらかに回転する

猫はときどき私を見る
ふっとすこしだけそっけなく

それを見ると恋を思い出す

白い毛なみに桜色のはだ
青いアーモンドの目が私を通りぬける
目のうえのヒゲがまつ毛のようだ

猫はとてとて歩く

私をときどき見る
私は恋を思い出す

幸せなことで哀しかったこと
半分ずつ

猫は美しく歩く』

*

日曜の昼下がりに。がしゃがしゃと玄関のガラス戸を、誰かがしつこく騒ぎ立てる。

「いるのはわかってるぞ。心やさしい同僚がビール片手にやってきたんだ、もれなく笑顔つきで出迎えるのが人として当然のことだぞ」

数少ない親しい友人のなかで、ただ一人性別が違うあいつの声を
する。

あまりにも元気すぎる声に苦笑いしつつも　そんなだからいつも
フラれるんだ！　騒々しい客を出迎えるために私は立ち上がった。
濃い雲と濃い青空が、圧倒的に上から襲いかかる。大きな入道雲が
空の半分にずうずうしくも居座り、冬の空を何枚もかさねたような
原色の青が地上の色に勢いをつける。古い家や桜の木がはつきりと
主張し、土が匂い立ち、人の気持ちが強くなる季節。

夏が来る。

10（後書き）

これで最終話です。読んでくださった方々には、とても感謝しております。この小説を一目でも見ていただけただけで、嬉しく思いました。

ありがとうございます

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3555b/>

春と夏のあいだに

2010年10月8日12時31分発行